

英語力が上がる授業 ～モチベーションと点数の関係～

英語班: 上野夏帆、國井歌乃、田上なずな、安原琴美、リーミング恵怜奈

Abstract

This study examines how motivation influences students' performances in the English tests conducted in our school. Using the students' self reported test scores and their autonomy, competence, and relatedness, we did a regression analysis. In the paper test, we found that autonomy and competence both predicted the outcome, whereas in the speaking test, relatedness was the only one to do so. This suggests that different aspects of the English language need different approaches to teaching them, respectively.

要約

本研究では英語力を向上させる授業のあり方を、モチベーションと点数の関係から調査した。本校生徒を対象にアンケートを実施し、自律性・有能性・関連性がテストの点数にどれほど影響を与えるかについて回帰分析を行った。ペーパーテストでは、自律性と有能性の両方が点数に影響を与えるという結果が見られたが、スピーキングテストでは関連性のみが影響を与えることがわかった。英語力向上には、伸ばしたい技能に応じて授業形態を変更することが重要であると結論づけた。

1. はじめに

高校生のうちに授業の中で英語力を上げる事ができれば、グローバル化が進む将来での生徒の活躍を促進できると考えた。そこで、本研究では「自己決定理論」というモチベーションに関する理論を高津高校の英語の授業に具体化した。自己決定理論では、自律性・有能性・関連性の3つの心理的欲求が満たされれば、モチベーションやパフォーマンス、精神的健康が向上すると提唱されている。本研究では、英語力をリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの4技能と定義し、調査によって得られた結果をもとに、英語力が上がる授業とはどのようなものかについて考察した。

2. 研究手法

- ①全校生徒を対象に、自律性を示す「英語学習へのやる気」、有能性を示す「英語力の自己評価」、関連性を示す「同級生や先生への親しみ」をそれぞれ0～10の11段階で評価する3項目と、総合英語のテスト(以下、ペーパーテストと表記する)の点数を問うアンケートを実施した。ただし、ペーパーテストは、リーディング・ライティング技能を測る指標として用いた。
本研究において、自律性とは、外的強制を受けず自らを律しながら主体的に行動している状態のこととする。有能性とは、自分に能力が十分にあり誰よりも優れていると感じられる状態のこととする。関連性とは、周囲の人から自分に興味を持たれていると実感できる状態のこととする。
- ②2年生を対象に、上記3項目(自律性・有能性・関連性)と、スピーキングテストの点数を問うアンケートを実施した。ただし、スピーキングテストは、スピーキング・リスニング技能を測る指標として用いた。
- ③得られた2種類のアンケート結果について、「JASP」という、アムステルダム大学心理学部で開発された統計解析ソフトウェアの回帰分析機能を使用して、上記3項目(自律性・有能性・関連性)のそれぞれが、テストの点数にどの程度影響を与えているかを調査した。

3. 結果

《ペーパーテストのアンケートについて》

どの学年においても、自律性と有能性はテストの点数に影響し、関連性は影響しないことがわかった。特に、有能性は自律性よりも影響が強いことがわかった。

	自律性	有能性	関連性
1年	0.161	0.191	×
2年	0.182	0.262	×
3年	0.185	0.307	×

(表1*) 3項目がペーパーテストの結果に与える影響

《スピーキングテストのアンケートについて》

関連性のみテストの点数に影響することがわかった。

	自律性	有能性	関連性
2年	×	×	0.280

(表2*) 3項目がスピーキングテストに与える影響

*表1、表2の数値は、大きいほど点数への影響が大きいことを示す。また、×印は点数への影響がないことを示す。

4. 考察

ペーパーテストのアンケートより、リーディング・ライティング技能を伸ばすためには、自律性・有能性を感じられる授業が有効であると考えた。一例として、簡単な小テストの定期的な実施がある。生徒に少しずつ成功体験を与え、英語力に対する自信を芽生えさせることができれば、技能向上に繋がることが期待できる。

また、スピーキングテストのアンケートより、スピーキング・リスニング技能を伸ばすためには、関連性を感じられる授業が有効であると考えた。一例として、授業中のペアワークがある。クラスメイトと会話する機会を与え、互いへの関心を高めさせることができれば、技能向上に繋がることが期待できる。

5. 結論

リーディング・ライティング技能を上げるためには自律性・有能性を、リスニング・スピーキング能力を上げるためには関連性を重視した授業が効果的であると考えられる。このように、伸ばしたい技能に応じて授業形態を変更することが英語力向上に繋がると結論づけられる。

今後の展望としては、英語力向上に効果的な取り組みを実際の授業に取り入れ、その後に本研究と同様のアンケート調査を行い、再度分析することが望ましい。また、自律性・有能性・関連性が点数に与える影響について、学年全体としてではなく、個人の変動を長期的に調査し、考察の信憑性を高めることが今後の課題となる。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

Edward L. Deci and Richard M. Ryan (2000)「The “what” and “why” of goal pursuits: human

needs and the self-determination of behavior」233～239ページ Department of Psychology
University of Rochester

横山 悟(2019)「学習に対するモチベーション理論及びモチベーション理論に基づいた学習方略理論」105～109ページ 千葉科学大学